

略

溝貝

〔古事記傳十六〕比良夫貝は古世に多かりし物とおぼしくて人名に負る書紀續紀にいと數多
 見えたり。○註 然るに和名抄などに見えざるは後に名の變れるにやあらむ。(中略) 今世に日月にカク
比良岐と云貝あり、岐は賀比の切たるにて、平貝の意にて、是にや又佐流煩と云貝あり、猿瀬ら多タ
まじてふ意にて、此の故事に依れる名にて、是にやされどこれら皆其名につきて思ひよれるま
貝は、月貝のことなり、此わたりの海に、いと稀にある物なりとぞ云ける、なほ國々の人尋
問は、今も古の名の残れる處も有べきなり、さて今飯高郡の海邊にて此貝の故事より出たる地名にはあらざるか、神鳳抄に、平生若く書て古は比良夫於と呼

〔今昔物語二十九〕鎮西猿打殺鷲爲報恩與女語第卅五

今昔、鎮西ノ口國ノ郡ニ賤キ者有ケリ、海邊近キ所ニ住ケレバ、其妻常ニ濱ニ出テ。(中略)貝
 ヲ拾ヒ行ク程ニ、山際近キ濱ナレバ、猿ノ海邊ニ居タルケルヲ、此ノ女二人烈○誤列恐テ歩ヒ寄ルニ、猿逃テ行カラムズラムト思フニ、怖シ氣ニハ思タル物カラ、難堪氣ニ思テ否不去デ、カバメキ居ケレバ、女共何ナルコト有ルゾト思テ、立廻テ見レバ、溝貝ト云物ノ大キナルガ、口ヲ開テ有ケルヲ、此ノ猿ノ取テ食ハムトテ、手ヲ差入レタリケルニ、貝ノ覆テケレバ、猿ノ手ヲ昨ヘテレテ、否不引出サデ、鹽ハ只満ニ満來ルニ、貝ハ底様ニ堀入ル、今暫シ有ラバ、鹽満テ海ニ入ベキ程ニ、此ノ女(中略)木ヲ以テ、貝ノ口ニ差入レテ、口ケレバ、少シ排タレバ、猿ノ手ヲ引出デツ、然テ猿ヲ助ケムトテ、貝ヲ可殺キニ非ズト云テ、異貝共ヲバ拾フ心ナレドモ、其ノ貝ヲバ知テ本作ニ和ラ、引抜テ、沙ニ搔埋テケリ、
○下

〔散木弃謡集九〕むかひの江にわらはのあそびたはぶる、を尋ねれば、みぞがひといふ物ひろふ
 なりといふを聞でよめる、